

岩手県水産技術センターニュース

シーガルボイス

SEAGULL - VOICE

No.11 1997年11月

全国豊かな海づくり大会特集

式典行事・第17回全国豊かな海づくり大会 ～次代を担う青少年に明日を託して～
10月5日、大槌町大槌漁港を海上に県内外から約2万3千人が参加し、第17回全国豊かな海づくり大会が開催されました。

この大会は、水産資源の培養と海の環境保全に対する国民の意識の向上を図るとともに、水産業の振興に寄与することを目的として行われました。

大会当日は、天皇、皇后両陛下をお迎えして、式典や放流行事が行われました。

式典・21世紀へ向け誓う

式典行事は、天皇陛下から今後の水産業と豊かな海づくりへのお言葉が述べられました。

そして、つくり育てる漁業の推進、森と海の環境保全、漁業後継者の育成を決意して、次代を担う海づくり少年団などの代表が全国にメッセージを発信しました。



海づくり少年団・緑の少年団によるメッセージ

放流・大きく育てて帰ってきて

大会のメイン行事として、天皇、皇后両陛下によるマツカワ、ヒラメなどの御放流や漁業後継者や海づくり少年団による放流が行われました。当センターで大事に育ててきたマツカワの稚魚も無事生みに放流されました。そして、21世紀に向けた岩手の新しい魚づくりの一歩となりました。



青年漁業士による放流

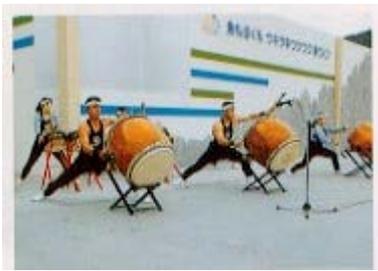
歓迎アトラクションようこそ岩手へ、大槌へ

この大会では、式典、放流行事のほかに岩手の水産をPRするため、さまざまな催しが繰り広げられました。式典海上の岸壁には関係機関が所有する船が停泊し、乗船体験をしてもらったり、県内各地の名産品をPRするテントが立ち並びました。

さらに、虎舞、獅子舞などの伝統芸能や太鼓、コーラスなどがステージにおいて披露され、観客から大きな拍手が送られていました。

また、海上では地元漁船による漁船パレード、岩手まるごと発信館による本県水産業の紹介など多彩な無いよう大会を盛り上げ、水産王国「いわて」を全国に発信しました。

1日で終わることを惜しまれながら大会は無事終了しました。



地元大槌町民による百年太鼓



釜石に伝わる勇壮な虎舞



地元漁船による見ごたえある
海上パレード

展示ブース・センターの研究内容を情報発信 ～「岩手まるごと発信館」へようこそ

水産岩手を発信したテーマ館

海づくり大会では、水産岩手を広くPRするために、テーマ館「岩手まるごと発信館」を設け、来場者に楽しんでもらいました。

ここでは、未来を切り開くマツカワ、ヒラメなどの新たな魚類栽培を紹介したほか、水上助三郎や前川善兵衛などの先人たちを紹介するコーナー、海の環境保全の大切さを知ってもらうコーナー、沿岸市町村のPRコーナー、試験研究機関のコーナーなど、多数の出展がありました。また、ウキウキワクワク広場では、大型水槽やタッチ水槽を設け、本県沿岸にいる魚介類を見るだけでなく、実際触れてもらったりしました。

当センターは、試験研究機関の1コーナーにおいて、研究内容や成果の紹介を行いました。



水産岩手を存分にPRしたテーマ館



海藻おしぼりコーナーも大人気



海づくり少年団によるきれいな海づくりのPR



「これ、なんだろう？」タッチ水槽で

センター展示ブース・マツカワのカラー魚拓でお出迎え

ここでは、特に、当センターが力を入れている分野の紹介をしました。エクストルーダーという機械を使った新しい視点の水産加工技術、マツカワの種苗生産技術、高成長アワビの育種技術、ワカメのバイオテク、サケの年齢を奥底する技術などをパネルによって紹介するとともに、生きたアワビ、ウニの水槽、パソコンなどを用いて分かりやすく紹介しました。

今回の目玉は、来場者を楽しませるために、当センターで育成した約70cmのマツカワを板橋勲先生にお願いして、特別に美術魚拓（カラー魚拓）として出展していただきました。来場者は立ち止まってじっくり見学していました。そのほか、2m近いワカメの標本や、アワビの年齢標本も人々の目を引いていました。

予想を超える来場者があり、持参した資料が底をつく状況でした。来場者の皆様に厚く御礼申し上げます。



パソコンによるセンター紹介



板橋先生（元久慈水産高校校長）作のみご



見る人を楽しませたセンターのブース

となマツカワカラー魚拓

センターからの多彩な催し物

センターからは、そのほかにも、乗船体験コーナーでは漁業指導調査船「岩手丸」が来場者を迎えるとともに、サケPRコーナーではイクラ作りが行われました。センターでは、当日、放流班、展示ブース班、乗船体験・イクラ作り班と、まさに職員を総動員して取り組みました。



乗船体験コーナーも大人気～岩手丸も着い

ていました



こめ之助とこめ次郎も応援しました



サケのつかみどりコーナー～実はみんなメ

スサケをねらっているのです

天皇、皇后両陛下によるセンター御視察

天皇、皇后両陛下は、海づくり大会で御来県された最終日の10月6日、当センターの施設や研究内容を御視察されました。センターの沿道では多くの釜石市民の皆さんがお出迎えし、センター開設4年目の今年は記念すべき年となりました。

天皇、皇后両陛下は、さけ、ワカメ、アワビ、そして両陛下御自身が御放流されたマツカワの研究内容を興味深く御視察されました。

サケ漁業資源研究と加工品

はじめに、本県ではサケは昔から「人々の生活にとけ込んできた魚であり、平成4年には「南部サケ」として「県の魚」に選ばれたことなど、サケとの深い関わりをご理解いただきました。

また、約1世紀にわたる人工ふ化放流事業への地道な努力が実を結び、漁獲量は、昭和40年代中頃までの千トン程度から昭和59年度には4万トンを超え、平成8年度には7万トンに達したことなどを御説明しました。

このようなサケ資源を造りだした増殖研究等の状況について、本県で技術開発した海中飼育や浮上槽の写真などを示しながら御説明しました。

次に、当センターで飼育しているふ化後2年10カ月と8カ月のサケやサケ稚魚の成長段階の標本を御覧いただきました。

また、回帰したサケの年齢を性格に判定することは、放流効果などを把握する上で重要であることを御説明し、4歳魚の鱗を万能投影機で御覧いただきました。

最後に、本県で加工されている代表的なサケの加工品を御覧いただきました。

全国一の品質と生産量を誇るワカメ

ワカメについては、現在岩手県の海面養殖業においてトップのシェアを占めていること、全国生産量の中でも4割を占め、全国1位の生産量を上げていることなどを御説明しました。

また、よりよいワカメ種苗を大量生産する方法として普及を行っている、無基質培養配偶体を用いて作った人工種苗を御覧いただきました。

さらに当所で行っているバイオテクノロジーに関する研究については、高品質ワカメの作出の基礎となるワカメのクローンを作る技術として、ワカメの莖を切り出したものを寒天培地で培養して組織を再生させる組織培養と、ワカメの細胞壁をアワビの中腸腺から抽出した酵素を用いて取り除き、細胞を1個ずつバラバラにするプロトプラストの単離について御説明し、それぞれ顕微鏡で御覧いただきました。

天皇陛下から、ワカメ養殖施設への種系の巻き込み方などについて御質問されるなど、興味深く御覧いただきました。

アワビの種苗生産と選抜育種

介類種苗開発研究室では、アワビの漁獲量や種苗放流数の推移、種苗生産の様子や増殖事業の内容について、また、アワビ養殖推進のために選抜育種を用いて成長優良貝を作る研究について御説明しました。

その後両陛下は実体顕微鏡でアワビの幼生を御覧になり、幼生が泳ぎ回る様子に大変ご興味を持たれたようでした。幼生期の殻の形から巻き貝であることを再認識されたり、遊泳器官である繊毛を、説明図を御覧になって確認されるなど、両陛下がお言葉を交わされながら御覧になりました。

この幼生は、この日に御覧いただくために10月1日に卵を取ってふ化させたもので、担当者は飼育管理に大変気を使いましたので、感慨もひとしおでした。

さらに、殻長2～3mmの稚貝、選抜育種による成長優良貝と通常貝、県内のアワビの加工品である干鮑、水煮缶詰、粕漬けを御覧いただきました。

マツカワの種苗量産技術開発

種苗開発棟稚魚飼育室ではマツカワの種苗量産技術の現状と課題について、パネルを用いて御説明しました。

まず、1枚目のパネルではマツカワの名前の由来や生態についてと、人工授精方法の概要を御説明しました。

2枚目のパネルでは、マツカワに関する試験研究の中から、自然産卵技術開発への取り組み状況と、親魚にホルモンを投与することで、通常より2カ月早く採卵できるということについて御説明しました。

3枚目のパネルでは、仔稚魚の飼育水温で雌雄の割合が変わるということと、稚魚期に砂を敷いた水槽で飼育すると、無眼側の体色異常（黒化）が低く抑えられるということについて御説明しました。

また、マツカワのふ化仔魚から変態を完了するまでの4つの標本を御覧いただきました。

最後に、前日の海づくり大会で御放流されたものと同じサイズのマツカワとクロソイの稚魚を御覧いただきました。



海づくり大会で御放流されたものと同じ大きさのマツカワ稚魚

当センターを御視察された天皇、皇后両陛下は、センター前の沿道に集まったたくさんの市民の方々に笑顔でお手を振られていました。10月6日は、センター職員にとっても記念すべき日となりました。

あしがき

天皇、皇后両陛下をお迎えしての豊かな海づくり大会と両陛下の当センターへの御視察をつつがなく遂行することができました。ご指導・ご協力をいただいた数多くの関係の方々・長期に渡り一丸となって取り組んでくれた職員に御礼と謝意を表します。

本県の水産業は今、日本の水産業を象徴するかの如く、時代の岐路に立っています。今回の慶事を契機に、試験研究のより一層の充実へ努め、両陛下が記念放流されたマツカワやヒラメを本県のつくり育てる漁業の新しいシンボルとして、水産業振興の夢を21世紀に引き継ぐ決意です。〔所長 齊藤 覺〕

海づくり大会と両陛下の御視察が無事終了し、ほっとした気分になっているが、本県の水産業に厳しい嵐が吹いているのが現実です。来る21世紀に向けて本県の水産を発展させて行くためにはセンター全員の創意工夫が何よりも大切です。今大会の意義を十分に理解し、漁業者から頼りにされるセンターづくりに向け、なお一層の努力が必要であろう。〔副所長 宮沢公明〕

○各部から

海づくり大会は予想を上回る参加者を集め、成功裏に無事終了した。準備に費やした苦労は相当なもので、終わった瞬間安堵感でいっぱいとなった。当日は、雨模様の天気にも悩まされたが、千葉晃史君の作文発表の大きな声が雨を追い払ってしまったようだ。同じように県漁業を覆っている暗雲をみんなでお気を出して吹き飛ばそう。〔伊藤〕

乗船体験コーナーでは、乗降や狭い船内の安全確保に気を使い、特に係船岸壁の水深が浅かったことから、岩手丸が安全に入港できるかどうかを最も心配しました。乗船口に常に長蛇の列ができ、およそ1,700人もの方に乗船、見学していただき、調査船に対する関心の高さが窺われました。〔高橋〕

関連行事として、イクラと新巻サケの加工実演を行いました。塩蔵イクラの製法は家庭には馴染みがないためか、熱心に作り方の質問をする人もあり好評でした。また、普段何気なく食べている新巻サケは、ずいぶん手間がかかる製品だとわかったという感想が聞かれ、レシピを参考に家庭でも挑戦したいという主婦の声が印象的でした。〔小野寺宗〕

増養殖部では両陛下に日本一のワカメを支える漁業者の現場の姿を伝えたいと思い、早期に漁場で刈り取りに励む夫婦の大型写真、漁業者が自家加工した木箱入りの塩蔵ワカメ、芽が出たばかりのワカメの種系、それに養殖施設の模型などを展示しました。これらを熱心に御覧になった陛下のご質問は「種系

はどのように巻き込むのですか？」でした。部員一同、連日の下準備が報いられた長い一日でした。

〔佐藤〕
全国豊かな海づくり大会のメインイベントである放流行事のための諸々の準備と、並行して進めた両陛下の御視察の準備には、正直なところかなりつらいものがありました。放流班員、種苗開発部員の頑張りの甲斐あって、つつがなく両行事を済ませることができました。両行事に携わった皆さんの頑張りに心から敬意を表します。〔支倉〕
行幸啓当日は昨日の天気かうそよやかな爽やかな秋晴れで、駐車場係の私には願ってもない天気であった。皆の願いが通じたのか、それとも両陛下に対する天の敬意なのか、一粒の雨も両陛下のお体にあてることなく送迎することができた。県職員の一員として、両陛下を間近で拝見できることの優越感、そして責任感を痛感させられた一日であった。〔A〕